

背景・課題

吃音とは？

言葉が滑らかに出ず、発話のリズムが乱れる発話障害

あ、ありがとう あー……りがどう ……ありがとう

人によって違う
時間帯・状況・相手・環境
大きく変動する

当事者自身も吃音の特徴を理解しにくい

心理的影響

吃音が出ると、

不安
「恥ずかしい」
「また出るかも」
自己否定
「どうせ言えない」

結果的に、

会話が減る
自分らしく話せない
人とのつながりが薄くなる
発言を避ける
言いたいことが言えない
自信が弱くなる自分らしく話す機会が減り
人とのつながりや自信が失われる

仮説

吃音の特徴を自己理解（出やすい音・場面・タイプ）

↓
次の行動が選択しやすい
・言い換え
発話意欲があがる

吃音があっても積極的に話せる！！

日常の吃音が可視化され、自分の特徴を理解できるようになると
次の行動が選択しやすくなり、意欲が向上する。
それによって、吃音があっても積極的に話せるのではないかな

目的

TalkBoost
開発日常の会話データを自動で収集し
AIで吃音の特徴を解析・可視化するアプリ自分の吃音の傾向や変動を客観的に理解できる環境を
つくり、その理解が発話意欲にどのような影響を与えるかを検証

研究意義

目的
克服

目的

自己理解→前向きに話す

この取り組みは、吃音を克服することを目的とせず、
“理解すること”を通じて、前向きに話す力を取り戻す
新しい支援アプローチ

方法（検証計画・システム概要）

①対象・期間

対象：吃音のある当事者2名（筆者＋友人）
期間：連続7日

③アプリの主要機能

タイムライン
重要会話を自動抽出し
カードで時系列表示
シーン単位で整理され、振り返りやすい詳細分析
文字起こし＋吃音箇所マーク、音声再生
AIのポジティブコメントで
「できた／挑戦した」を可視化デイリーレポート
1日の会話を集約し、グラフで傾向可視化
1日の終わりに前向きに振り返る要約

④アプリの仕組み



⑤評価指標・手順

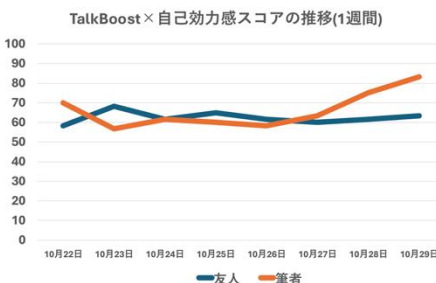
アウトカム：自己効力感スコア

毎晩「20問アンケート」を実施
(0-100点に得点化)
1週間での発話意欲の変化を評価

デイリープロトコル

朝：ペンダント装着
日中：通常生活／会話→自動収集・解析
夜：20問アンケート（自己効力感）

結果

吃音の特徴を理解することで
言い換えなどの
工夫がしやすくなった。筆者
可視化によって「できた・話せた」の実感が増加
発話意欲は上向き傾向苦手な音を練習する際に
吃音が出やすい音が分かるのは
非常に役に立った友人
自己理解は促進されたが、
発話意欲より改善・治療に作用。アプリ使用による 大きな上昇傾向は見られなかった
ただし、自己理解の活かし方は人によって異なった

考察

自己理解＝発話意欲の向上とは限らない

自己理解の先にある行動は
人それぞれのコミュニケーションの目的によって異なる

今後の展開

1.可視化の伝え方の改善

吃音が悪いものとして見えないよう、表現を工夫する必要あり

2.ポジティブ・フィードバックの強化

前向きに話す意欲につながる仕組みをさらに充実。

3.AI精度の向上

専門家（筑波大学 吃音研究者）との照合により、
連発・伸発・難発の判定信頼性を向上させる。

まとめ

TalkBoost は、吃音を克服ではなく理解することで、

吃音があっても積極的に話せる世界をつくる！

理解の先の行動を支援する仕組みへ進化していく